

## インフルエンザについて（第8報）

今週は2014年の第7週です。毎週月曜日ごとに推定患者数は増加を続けていましたが、第7週の月曜日（2014年2月10日）の推定患者数は約25万人となり、前週の月曜日の推定患者数を下回りました（図1）。1週間ごとの累積の推定患者数をみると、第4週は約85万人、第5週は約115万人、第6週は約105万人であり、今シーズンのインフルエンザの流行のピークは第5週であることがわかります

[http://www.syndromic-surveillance.net/yakkyoku/yakkyoku\\_nippou/2013\\_14/index.html](http://www.syndromic-surveillance.net/yakkyoku/yakkyoku_nippou/2013_14/index.html) 参照）。

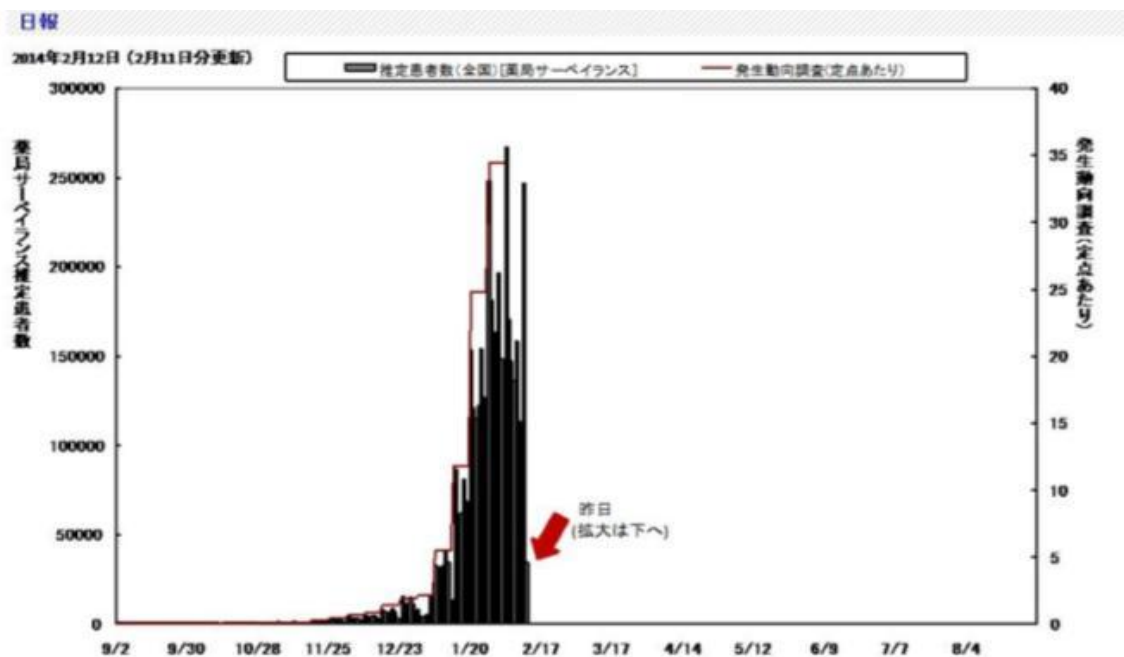


図1. 薬局サーベイランスによるインフルエンザの推計受診患者数の日別推移（2013年9月1日～2014年2月11日）

次に図2を示します。これは都道府県別のインフルエンザの流行の指標として、過去3週間の都道府県別の人口1万人当たりのインフルエンザ罹患者数推計値の推移（2014年第4週～第6週）を示しています。第6週の推定患者数が第5週を上回ったのは、北海道、岩手県、宮城県、秋田県、福島県、群馬県、新潟県、福井県、山梨県、愛媛県の10道県のみで、他の37都府県は減少しました。

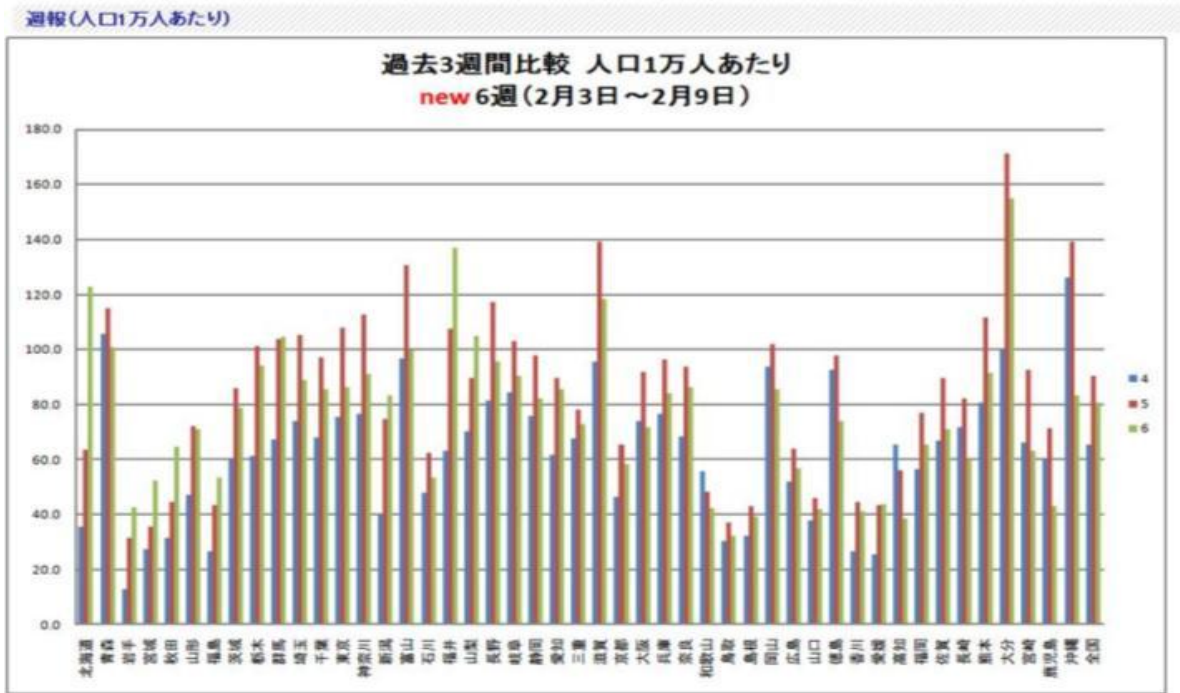


図2. 薬局サーベイランスによる過去3週間の都道府県別の人口1万人当たりのインフルエンザ推計罹患患者数の推移 (2014年第4~第6週)

インフルエンザウイルスの日本国内の患者由来検体からの検出状況ですが、昨年9月からの、今シーズン(2013/2014年シーズン)を通しての累積の検出数ではA/H3N2(A香港)亜型の検出割合が最多を占めています。一方、図3に示す通り直近の5週間ではインフルエンザA/H1N1pdm2009(以下A/H1N1pdm)が50.2%と最多であり、次いでB型26.1%、A/H3N2亜型23.7%の順となっています。流行が本格化してからはA/H1N1pdmが流行の中心となっています。

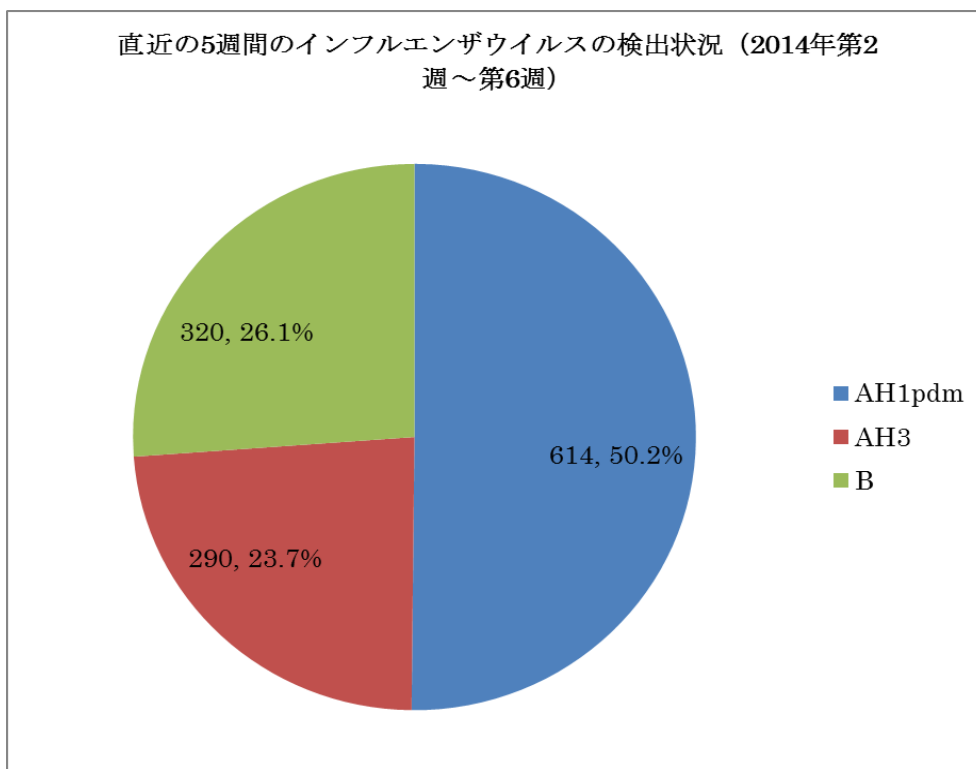


図3. 直近5週間のインフルエンザウイルス検出状況（2014年第2週～第6週）（国立感染症研究所感染症疫学センターホームページ：<http://www.nih.go.jp/niid/ja/iasr-inf.html>参照）

インフルエンザの感染対策としては、飛沫感染対策としての咳エチケット、接触感染対策としての手洗い等の手指衛生が重要です。インフルエンザの主な感染経路は飛沫感染ですから、インフルエンザの流行期間中は、医療関係者や福祉施設の職員のように、日常的に体力、免疫力が低くなっている人と接する方は、勤務時間中はマスクを正しく着用して周囲に自分の飛沫（会話をしているだけでも飛沫は口から発せられます）お奨めします。もちろん、咳などの症状のある方は人と接するときにはマスクを着用するなどして咳エチケットに努めてください（厚生労働省インフルエンザQ&A：<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekaku-kansenshou01/ga.html>）。インフルエンザは、感染した人が全員発熱、急性上気道炎、関節痛、頭痛、筋肉痛、全身倦怠感等の典型的な症状を発するものではなく、中には感染していても全く症状のない人（不顕性感染例や）、かぜのような症状のみでインフルエンザウイルスに感染していることを本人も周囲も気が付かない軽症例もたくさんいます。従ってインフルエンザの感染対策は、自分が周囲の人に感染させる可能性があるかもしれないと考えて行うべきです。

今シーズンのインフルエンザの流行は本格化してからはインフルエンザ A/H1N1pdm2009が流行の中心であり、例年と同様に2014年第5週が流行のピークとな

りました。今後インフルエンザの患者発生数は減少していくと予想されますが、B型インフルエンザの患者発生数だけを見ると今後1か月間はまだ増加傾向が続くと予想されます。今シーズンはB型インフルエンザが流行の中心ではあるけれども、現時点でも患者の4分の1はB型インフルエンザの感染が原因であり、今後は患者発生数は今よりも少なくなりますが、B型インフルエンザが流行の中心となると思われます。インフルエンザの流行が一段落するのはおそらく3月の中旬以降であり、それまではまだまだ注意が必要です。

2014年2月13日

大阪府済生会中津病院ICT

安井 良則